

## あの言葉が私の心を支え、 家族の絆をつないでくれた。

福山教会 井上裕代さん

井上裕代さんは5年前、高校2年生だった娘の変化に揺れ惑っていた。学校へは行かず、髪を染めて厚化粧をし、夜は繁華街へくり出す。家族で真剣に話し合った末に、高校を退学後、レストランで働きはじめた。生活が落ち着きはじめて矢先に妊娠が発覚。娘の妊娠を受けとめることができず思い悩んでいた時、相談にのってくれた人から、「大丈夫、産ませてあげなさい。尊い命の誕生です。きっと親の思いのわかる娘さんになりますよ」と諭され、心が定まった。その後、女兒を出産し母となり子育てと家事を立派にこなしている。ある日、娘から手紙をもらった。そこには、自分が娘をもった今だからこそわかる母という存在と感謝の気持ちがつづられていた。以前諭されたときの「きっと親の思いのわかる娘さんになりますよ」という言葉が実感として胸に迫ってきた。手紙を読みながら、裕代さんは娘と心が一つになれた喜びで、涙が止まらなかった。



## 言葉が人をつなぐ

私たちは、言葉をはじめ人間に与えられた恩恵に対する感謝を忘れてはなりません。では、そのために何をすればいいかというと、まず「自分」を見失わないことです。

宇宙全体のなかのほんのわずかな人間、神仏に生かされている自分、この自覚に立つと、口にする言葉にもおのずから「ありがとう」や「おかげさま」という感謝の心がこもります。失敗や礼を失したときには、素直に「ごめんなさい」と謝り、頭も下げられるでしょう。そして、こうした言葉が行き交うところでは、円滑にものごとが流れ、人間関係もあたたかな潤いのあるものになっていきます。人と人との心をつなぐのは、こうした感謝の言葉であります。

もう一つ大切なのは、どのような言葉が大事かではなく、どのような自分がその言葉を発しているのかということです。端的にいうと、いつていることやっていることが一致しているかどうか——言葉が相手の心に届くかどうかはそこにかかっているのだと思います。信仰や信頼の「信」という字は、「人」が「言う」と書きます。人が信ずるに足る言葉とは、発するその人がどのような生き方をしていくかによります。

# 立正佼成会